
ダークマジシャン-2nd stage-

覇王樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダークマジシャン－2nd stage－

【Nコード】

N7509X

【作者名】

霸王樹

【あらすじ】

主人公のザックスは英国系日本人であり幼いころにイギリスの武器として体に特殊能力を組み込まれていた。ザックスとミイナにとってイギリスは危険とボスに言われ2人は日本へ引っ越すことになった。しかし、そんな情報はすぐに漏れていて日本で待っていたのは術者狩りというザックスたちを狙う組織だった。そんな中ザックスとミイナは日本で実験された術者4人と出会う。ザックスたちの運命はどうなるのか？

第0話（第30話） プロローグ

プロローグ。

※下記は1期のネタバレがあるので読んでいない人は

<http://ncode.syosetu.com/n8344w/>

舞台はイギリス。

主人公のザックスはイギリスの戦争の兵器のため幼いころに体に特殊能力を組み込まれた。戦争により亡き恋人マリがザックスの身代わりで死んだあとザックスは旅を成功させればマリに会えるということを知り旅を始めた。

2

最初はキリヤという幼馴染と始めたが色々人を助けていくとルメリ、テイト、ミイナと一緒に旅をすることになったがそこには術者狩りというザックスたち術者の力を悪用に使用するため必要とする人物が沢山いる。

そんな術者狩りを倒していきながらもザックスは無事に亡き恋人マリに出会うことが出来た。

辛い別れの中ザックスたちは村に変わるとお互い自分たちの道を進むことにした。

そんな中ザックスとミイナはボスの薦めにより安全な日本へ行くこ

とになった。

そこには新しい仲間や出会い。

そしてザックスたちを待っているものは・・・

まもなく投稿開始！！

第1話（31話） 新たなる日々（前書き）

☆この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。☆

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかったら、評価・感想・お気に入りをお願いします。

はーい第2期もやっていきます。多分11月の中旬ぐらいで終わるかな・・・

第1部読んでいない人は第1部からがいいと思います。詳しくはブログで!!

第1話（31話） 新たなる日々

1話

ロンドン・ヒースロー空港

「それじゃあ気を付けてね。ときどき連絡してよ。あ、あとそのスマートフォンの使い方大丈夫？」

とキリヤは聞いてくる。

「大丈夫なんじゃない？」

と俺は適当に答えると

「大丈夫だよ！キリヤ もう、私が使いこなしているから」

とミイナは言う。

「ザックスさん。決してミイナさんには手を出さないように。」
とテイトは注意深く言う。

「わかってるって！そんなことするわけないだろう！」
と答える。

「ザックスさん、体の方には気を付けて！」
とルメリは言う。

「ああありがとう。」

「ザックス！あんたロリコンとは知っていたけど一緒に2人だけでクラスとなると結構心配だな・・・」
とマリヤは言う。

「うるせえな。大丈夫だって言ってるだろ。」

・
・
・

「それじゃあいつてきまゝすとミイナは言う。」

「じゃあな おまえら」
と俺はいい パスポートコントロールをくぐっていった。

そうこれは1か月前だった。

「ザックス。よく帰ってきたな」
とボスは言う。

「ありがとよ、ボスさん。 おかげであいつにも会えることが出来て俺は良かった。」

「そうか、ならばよかった。しかし、今回お前さんの行動で世界中は君を欲しがっている。

特にこのイギリスはな、だからザックスに私は任務を与える。

そう、日本でしばらく暮らしておくれ、手続きは俺の知り合いの大

学の教授に任せておいた。

引っ越しは明後日から行う。そして悪いがミイナも一緒にだ。あいつの力もどうやら狙っているらしい。」

「はいはい。」

と俺はいつもの癖で返事してしまう。

「っておい！な・・・なんていった？　日本？日本へ引っ越し？しかも引っ越しは明後日から？え？
しかも with ミイナって・・・　え？おれとミイナが日本で暮らすの？」

「ああそうだが？」

「ええ？なんで？」

「ああ大丈夫、君とミイナは日本の学校に行ってもらうことになる、頑張るんだぞ。」

「話聞け―」

――家

「ただいま。」

「おかえりーザックスー。聞いたよ聞いた。私達一緒に日本に行くんだよね？」

「お前、どこから、」

「今日ボスに聞いたの 私楽しみ―」

・
・
・

・
・
・

という訳で俺たちは飛行機の中。

日本へ向かっていた。

――成田空港。

「うわあすげえ 全部日本語だ・・・」

とザックスは言う。

「すごいすごい！日本人ばっかだ！」
とミイナは言う。

そうすると後ろから女の人が出てきた。

「すみません、海藤君と吉川さん？」

俺はあまり慣れてない名前で呼ばれたので少し反応が遅かった。

・
・
・

・・・

——大学研究室。

「はじめまして、私は特殊能力研究の教授　春田　南　みなみ　あなた達のお世話をしていくことにもなるわ。」

「あ、俺は　ザ・・・じゃなくて　海藤　考樹です。」
「私は吉川　由紀です。」

「そう、それでいいの」
と春田は言う。

「これからは学校にも行くことになるからなるべくそっちの名前を使っ
てね。」

それともう一つ約束してほしいことがあるの・・・」

・・・

・・・

わたしは普通の学校に行っている女子高校生の2年生。

でも私は普通じゃないの。少し変わっていて・・・

実は特殊能力を持っていたりするの

・・・

・・・

「おはよみづき 美月 今日みづきも元気いい？」

と話しかけてくる友達の優香。

私は 小鳥坂ことりざか 美月みづき よく小鳥ことりとかも呼ばれる。

さっきも説明したけれど 普通の高校に言っている女子校生

今日は新学期。新しい転校生とかも来るから楽しみってなわけだったが、まさかこうなるとは思っていなかった。

——— 学校

「えーつと名簿と名簿」

新しくクラスも変わったのできちんと見ておいた。

そこに見たいことのない名前があったことに気付いた。

「海藤 考樹？（かいどう こうき） このひと転校生かしら・・・

」

「みづきみづき 何見てるのい まさか転校生を狙ってるの？」

「な・・・なに言ってるのよ？ まさかそんなことするわけないでしょう。」

「だよね」 実は、その転校生って超イケメンらしいよ。」
「え？」

まさか転校生が特殊能力を持っているなんてしらずに。

――アパート

「よし、お前はここの学校にいくんだぞ。多分イギリスの時と変わ
りないともうがな。」
とザックスは言う。

「うん、わかった」

とミイナはいい、家を出て行った。

・
・
・

ザックスが学校に向かう途中。

「しかし、聞いていたが、日本の学校は歩いたり自転車を使って
登校するのか・・・」
という。

その時かすかに、こんな声を聴いた。

「ザックス・アンドレス の身元を確認」

しかし、俺は気のせいだと思い無視していった。

・
・
・
・

学校

キーンコーンカーンコーン

とチャイムが鳴る。

俺は後ろの方の真ん中の席に座っていた。

すると、後ろに座っている男に声をかけられた。

「君が海藤くん？はじめましてだね。」
と優しく声を掛けられる。

「あ、ああ海藤です。」
と答える。

「どこの高校から来たの？」
と聞かれるが答えられない。

「えっと・・・遠い方の・・・田舎の高校かな・・・」
と適当に俺は答えた。

「そっか。俺は斉藤 楓太 よろしく。」

「ああ、よろしく」

キーンコーンカーンコーン

ともう一度チャイムが鳴る。

「はい、今日から担任の橋澤 美由紀はしざわみゆきです。よろしくです。」
と担任の女の先生が言う。

・
・
・

キンコーンカーンコーン

とチャイムが鳴り今日は始業式だったので半日で終わった。

俺はそのあと先生に呼び出されいろいろと学校を説明してもらった
後に下駄箱へと向かった。

そして靴を履きかえていた。その時

「ちょっと、いいかしら。」

と声を掛けられた。よく覚えていないが、なんかクラスにいたような顔だった。

「今日、一緒に帰ってもいいかしら。」
と聞かれた。

「なんですか？ いきなり逆ナンパですか？」

と言う

「何を言ってるの？ 妄想し過ぎよ！」
と答えられた。

・・・

・・・

そして俺とそいつは一緒に帰っていた。

「ところでなんだ？ 話って。」

「ああ話ね。まず自己紹介しないと。私は小鳥坂 美月。あなたは海藤 考樹だよね？」

「ああそうだが？」

「そう、ならOKだわ。じゃあ単刀直入に聞くわ。」

「おう」

「あんた、特殊能力の持ち主だよな？」

「特殊能力？ なんだそれ？ なんか物を浮かべたりとか？ そんなのできねえよ」

「あんた隠しても無駄わよ。無駄！」

「なんで隠すんだよ？ そんなもの 言ってみてくれよ」

「そんなの決まってるじゃない・・・あれっ・・・あれわ・・・」

「どうしたんだいきなり」

と俺が聞いた瞬間、小鳥坂は俺をつかんで走って行った。

・
・
・
・

「なんだよ？急に」
と俺は聞く。

「あんたね・・・大丈夫かしら。。。 あれは術者狩り（マジシャ
ン・ハンター）よ・・・」

「術者狩りだと？ 日本にもいるのか？」

「ええ、でもあいつらは撤退したはずだわ。 あっいけない、こ
の後塾があるんだった・・・」

あんたも術者狩りには気をつけなさいよ。」

と言って帰って行った。

俺もすぐに家へと戻った。

・
・
・
・

家の前に着くとミイナが扉の前で待ってた。

「もお遅かったじゃん！」

「わりいな。俺も遅くなったんだから。」

と扉を開けようとした時、新聞受けに手紙が入っていることに気付いた。

「誰からだ？」

と俺は手紙を開けて内容を読んだ。

『宛て…ザックス・アンドレス

お前がここに住んでいることは間違いないだろう。

もし、お前がザックス・アンドレスなら団地の前の公園に7時に姿を現せ。』

と書いてあった。

「誰から手紙？」

とミイナは聞いてくるが

「ああ教授からだ。」

と俺はうそをつく。

そして7時

公園へと向かう。

第2話（32話）公園（前書き）

☆この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。☆

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかったら、評価・感想・お気に入りをお願いします。

第2話(32話)公園

俺は公園へ向かった。

すると急に後ろから気配を感じた。

「誰だ!？」

と俺は叫ぶ。

「さすがだな。ザックス・アンドレス。」

と現れたのは一人の男と2人の女だった。

「俺らは今からお前を殺す。」

と男は言う。

「ちょい待てよ!なんで俺が?お前らは術者狩りか?」

と俺は言う。

「術者狩りじゃないんだ。ただ、お前に恨みがあるだけだ・・・」

と男は言うと言ってくる。

相手は光術師だった。

「お前ら卑怯じゃねえか? 3VS1はないだろ?おい!」
とザックスは言う。

「お前が死ぬことには変わりないんだ・・・」

と男は言う。

「うち・・・お前ら・・・怪我してもしらねえぞ・・・」

とザックスは言うのと3人を吹き飛ばす。

「なんて威力なの!？」

と女は言う。

「てめえら 恨みがあるだろうがなんだろうがしらねえが・・・
ここで言ってもらおうじゃねえか」

とザックスは言う。

「言う前に俺らはお前を殺すんだよ!」

ともう一人の男はいい襲ってくる。

「近づくな!」

とザックスはいいその男を飛ばす。

「そんなの・・・あなたに分かるわけがないじゃない!」

と女は泣きながら言う。

「お前は・・・俺の姉ちゃんを・・・」

と男は言う。

3人とザックスは戦いを止めて3人はザックスに話し始めた。

「当時は術師なんて珍しかった。なんで俺たちが術師かというと・
・ 日本人がイギリスの技術を使用しようとして俺たちを使った。

それが俺たち4人だった。

4人というのは 有理姉ちゃんと俺、裕太と透哉と綾乃だ。」

と裕太は話す。

「おいおい、待てよ・・・ 有理って・・・まさか・・・」
とザックスは言う。

「そのまさかだよ。 俺の姉ちゃんはお前が知っているマリっていうやつだよ。

姉ちゃんは俺たちの中でも強かったんだ。術者って言っても俺たち4人しかいなかったんだ。だから術者狩りに狙われてもおかしくなくていつも4人で行動していたんだ。学校でもばれないように頑張ってきたんだ!!

でも5年前に姉ちゃんはイギリスから成功作って言われて姉ちゃんはイギリスに送られた。

俺たちは失敗作。失敗はイギリスに必要とされなかった。 本当は俺たちもイギリスに行くはずだったんだが。」

「私だって別れたくなかったもん。」

と綾乃は話し出す。

「有理ちゃんと一緒だったから・・・ここまで生きてこれたのに・・・」

「俺たちは姉ちゃんを遠い日本から見守っていた。だけど2年前だった・・・俺たちはイギリス政府から姉ちゃんは戦死したって聞いたんだ。もうその時はずっと泣いていたんだよ。もう俺たちは生きていけないと思っていた。」

そのあと俺たちは姉ちゃんの墓があるイギリスへと向かった。

・・・

『あれが・・・マリの・・・いや 有理さんの墓よ・・・』

と当時のキリヤが言う。

『あの・・・お墓の前にいる人は誰ですか？』
と綾乃は聞く。

『・・・あの人は・・・』

俺たちは事実を知った。 姉ちゃんは戦死じゃなかったって。

あのお墓の前にいるやつのために死んだ。 あいつが死ぬのを姉ち

やんは犠牲に・・・

俺たちはそいつをずっと憎んでいた。　ザックス・アンドレスを。

俺たちは墓をお参りをするだけのはずだったのに悲しい知らせを聞いただけだった。

『あいつのせいで・・・　あいつのせいで・・・』
と俺はずっとつぶやいていた。

『ねえ、裕太　あの人・・・ずっと墓の前で泣いていたけど・・・』
と綾乃は聞く。

『そりゃそうだろ・・・人の墓の前で笑っていたらぶち殺すところだからな・・・』
と俺は答えた。

そして、先週の事だった。　俺らはお前が日本へ引っ越してくることを知ったんだ。』

と裕太は全て話す。

「すまん・・・　わかってるんだ・・・俺も・・・　マリが死んだことは・・・　全て俺が悪いんだ。

俺も知っているんだよ・・・　あの時俺がもっと強ければ・・・
俺は命を変えてでもしようとしたんだ。

そうだ・・・　いい締めだな。　おい、お前。　俺をころしてくれえ。
それでいいだろ・・・」

とザックスは言う。

綾乃と透哉は驚く。

そして裕太は

「わかったよ・・・それで俺らの恨みはなくなる・・・それでいいんだな。」

と言う。

「ああ」

とザックスは言う。

「それじゃあ殺させてもらおうか・・・」

と言うと裕太は手を伸ばしたザックスに攻撃をする。

「(そんな・・・うそでしょ・・・)」

と綾乃は思う。

・・・

・・・

「うっ・・・」

とザックスは目を開ける。

「悪いがまだ話は終わっていないんだ・・・」
と裕太は攻撃をわざとはずす。

「俺らはその1週間前にもう一つのことを聞いた。それはお前が姉ちゃんに会うために1年もかけて旅をしていたことをな。俺らは最初それを信じなかった。でもお前のことは事実だとイギリス政府は証明した。俺らは考え直したんだ お前がどれだけ俺たちの姉ちゃんのことを思ってたのか・・・ 命を懸けて姉ちゃんに会ったのか・・・ そんなやつを殺せるわけねえだろ？俺が。」

俺達は思ったんだ。姉ちゃんは戦死したんだ。愛する人のためにな。だから俺たちはお前にお礼も言いたいんだ。」

と裕太は話す。

「もういいんだ。俺は。所詮ぼろぼろになった雑巾だ。」

とザックスは言う。

「ほうほう。術者さんがいっぱいいるみたいですね・・・」

とある男が話しかける。

「しまった。術者狩りだ！」
と透哉は言う。

「日本に術者狩りだと？」

とザックスは言う

—end—

「術者狩りね、その通りだよ。僕は君たちの力をもらいに来たんだからここで死ぬわけにはいかないのさ。」

というと術者狩りは攻撃をしてくる。

・
・
・
・
・

キーン

誰かが攻撃を止めたような音がした。

「確か・・・海藤・・・考樹だっかしら・・・早く逃げなさいよ・・・」

と同じクラスメイトの小鳥坂 美月が言う。

「なんでお前がここに？」
とザックスが言う。

「理由は後で説明するわ・・・この周りにはたくさんの術者狩りが居るの・・・だから早く違うところに!!」

と美月は言う。

「わかった・・・」
とザックスが言う。と4人は行く。

「あの人は誰なんだ？」
と裕太は走りながら聞く。

「よくわかんねえが俺に術者だろ？とか今日聞いてきたんだよ」
とザックスは言う。

「（まだ術者がいるのかしら・・・）」
と綾乃は思う。

「あ、術者狩りが！！」
と透哉は言う。

「（しまった・・・ ミイナが・・・）」
とザックスは思う。

「お前ら！俺はこっちに行くから手分けでいくぞ！」

とザックスは言う。

「わかった。そっちをよろしく。」

と裕太は言う。

そしてザックスはアパートへと向かった。

・・・

・・・

「ミイナ!!」

とザックスは叫ぶ。

「どうしたのよ? いきなり?」

とミイナは言う。

「良かった。お前・・・ そうだ・・・ お前だから今の現状が分かるはずだ・・・」

とザックスは言う。

「それが・・・ こっちに来てから全然予知ができないの・・・ だから・・・」

とミイナは言う。

すると

ドーン!!

「誰だ!?!」

とザックスは言う。

「慌てることはないですよ。ザックスとミイナ。 ちょっと待っているだけで体が浮くから・・・」

と言うと術者狩りは銃で撃ってくる。

「逃げるぞ!!」

とザックスはミイナを抱いてベランダから降りる。

「ちょっと！？ザックス！？なんなの？」

とミイナは聞く。

「俺もわからねエンだ！急ぐぞ！」

とザックスは言う。

するとザックスたちは術者狩りに挟み撃ちされた。

「くっそ・・・行き止まりか・・・」

とザックスは言う。

「ザックス。私、戦えるわよ・・・」

とミイナは言う。

「わかった。いくぞ！！」

とザックスは言うと2人は攻撃を始める。

「うおおおおお」

「いけええええ」

・・・

「なんて数の術者狩りだ・・・」
と裕太は言う。

「さすがザックスたちの情報だけでこんなに集まるなんて・・・」

と綾乃は言う。

「一人ずつやっていく時間はなさそうね・・・」
と透哉は言う。

「うわああああ」

と綾乃が叫ぶ

「綾乃!!」

と裕太は言う。

しかし3人はやられてぼろぼろになる。

「うち・・・なんて強いんだ・・・いつもと違うじゃないか・・・」

と透哉は言う。

「もういいだろう・・・ここで眠るんだ!」

と術者狩りは言う。

ドーン!!

「おい、テメェら。何しようとしてんだよお。そんな汚いやり方で。」

そこにはザックスとミイナがいた。

「おいお前ら。後のやつは俺とミイナで処分しておいたからよ・・・
後はやるんだ・・・」

とザックスは言う。

「うおおおおおっおおお!!」

とザックスは叫ぶ。

そして相手の術者狩りは攻撃を止める。

「なるほど、俺の攻撃を止めるとはな・・・ じゃあよ これでど
うだ？ ダークインパクト!!」
とザックスは攻撃していく。

・
・
・

そして相手の術者狩りは倒れた。

ザックスは3人を安全な場所に運びミイナは救急処置をした。

「お前ら大丈夫か・・・」

とザックスは3人に声を掛ける。

「ザックス、この人たちは？」
とミイナは聞く。

「ああ友人だよ、こっちの。」
とザックスは言う。

「ほんと、ザックスって友達作るのはやいねえ」
とミイナは言う。

「おいおい、まだ友達は認証してねえぞ。それよりこの小っちゃくてかわいい女の子はお前のなんなんだよ?」
と裕太は聞く。

「可愛いつてなによ!」
とミイナは言う。

「ああ、こいつはあれだよ俺んところのいそうろうだ。」
とザックスは言う。

「いそうろうじゃない!!」

この場所に笑顔がいつの間にかあった。

・
・
・

次の日・・・

「いってきまーす!!」
とミイナは言い出ていく。

「いってこーい!!」
とザックスは言う。

そしてザックスも登校した。

「おはよー海藤君！！ ニュース見たかい？ 大爆発が起きたんだってよ？」

と同級生の齊藤は言う。

「そうなんだ。この街も怖いな。」
とザックスは言う。

教室に向かう途中 会いたくない人に会ってしまった。

「ちょっと！海藤！！ こっちに来なさいよ！！」
と呼ぶのは小鳥坂だった。

「あれ。。。美月さん・・・なんでしょうか・・・」
とザックスは言うと言つ張られていった。

「珍しいな 小鳥坂が男を引つ張るなんて！！」

と齊藤は思っていた。

・・・

場所は人目が見つからないところだった。

「あのお・・・なんでしょうか・・・ 小鳥坂さん。」
とザックスは聞く。

「なんでしょうかって・・・ あんたそれはないでしょう！」

と小鳥坂の顔が近かった。

「あんた・・・やっぱり術者だったのね・・・なんで隠しておくのよ!!　なんか様子がおかしいと思って後を追ったら問題に巻き込まれてたじゃない!」

「あの小鳥坂さん・・・それって・・・ストーカー?」

バシン!!

小鳥坂の手が俺の頬に思いっきり当たる。

「なんで私があんたのストーカーなんてしないといけないのよ!?!? バカでしょ?」

と小鳥坂は言う。

「それより、お前も術者なんだな・・・」

「絶対に言わないでよ!!　私も・・・あんたのこと言わないから・・・それとあんたと一緒に同居しているあの小っちゃいのもね。」

「お前、どれだけストーカーしてるんだ・・・」

と言った瞬間もう一発喰らってしまった。

「術者ね」

と何か目線がしたような気がした。

・・・

学校帰り、門からはカップルが歩いて出て行ってた。

すると向こう側に違う制服の女の子が立っていた。

よく見ると昨日の綾乃だった。

「あ、ザックスさん!!」

と叫んでいる。

俺は綾乃のところへ向かった。

「あの、ザックスさんいきなりすみません。その昨日はありがとうございました!!」

と綾乃は言う。

「ああ問題ないよ。」

「ところで・・・聞きたいことがあるのですが・・・ザックスさんは有理ちゃんって・・・恋人だったのですか!？」

とあまりにも綾乃のストレートの質問に飲んでいたコーラを吹いてしまった。

「大丈夫ですか!？」

と綾乃は言う

「大丈夫だよ・・・恋人だったのかな・・・なんだったんだろう・・・あいつはこんなオレでも支えてくれたからな・・・」

人前じゃ強がっていて本当は弱い俺を。　ここまで強くしてくれたからな・・・

あいつが学校で勝負を挑んでなかったらこんな俺ではなかっただろう。」

「（ああ有理ちゃん、来た早々に勝負を挑んだんだ。）」

「ところでザックスさん！！　有理ちゃんのどこが好きなんですか？」

「またもやストレートだな・・・　俺は・・・　あいつがくれた本当の強さが好きなんだ。　変わってるだろ？」

「いや、そうでもないですよ。　私の有理ちゃんだったらそんなことしそудもん・・・　あ、すみません。私こっちなんで・・・　あ、もしよかったら電話番号を・・・」

「ああ　いいよ　はい。」

「（スマートフォン・・・　最新すぎてわからない・・・）
と綾乃は思う。」

・・・

「ただいまー」
と俺はミイナに言う。

「おかえりー」

「なあミイナ学校はどうだった？」

「うん、楽しかったよ!!」

とミイナは言う。

「そっか・・・なら大丈夫だな・・・」

「ねえザックス・・・昨日も守ってもらっちゃったね・・・」

「気にスナって。。。」

とザックスは言う。

「今度は・・・私がザックスを守るんだからね・・・」

「それはありがとな・・・でも死んでもらうのはもう勘弁だからな・・・」

—end—

第3話（33話）都内観光（前書き）

☆この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。☆

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかったら、評価・感想・お気に入りをお願いします。

第3話（33話）都内観光

3話

俺たちは日本に来て3日目を過ごそうとしていた。

一昨日は早速戦いに巻き込まれ大変だったがどうにかばれる事もなく今日も普通どおりに学校へ行ってた。

「海藤！！おはよー」

いつもの斉藤が話しかけてくる。

俺たちはなれない学校を2人で入り靴を履き替え教室へ入る。

イギリスでも日本の学校にいたがこんなに広くて人数が多いと本当に驚くもんだ。

ほかのみんなは高2だから友達はたくさんいる。でも俺はことしきたばかりだからまだいない。

まあそれは徐々にどうにかなるだろうと思いつもののクラスに座る。

術者狩りのことだがまだイギリスには報告していない。なぜならミイナも学校になれたことだしこれから引っ越すとかわいそうとも思った。でも本音はあまりみんなに迷惑をかけたくなかったんだ。

そうやって考えてるとある女が話しかけてきた。最初は小鳥坂かと思っただがよく見ると違う人だった。

確か近藤真奈だったか。

「ねえ海藤君、いきなりごめんね。」

「いやいや、大丈夫だけど。」

「海藤君ってまだ来たばかりなんでしょ？」

「ああ・・・そうだけど・・・」

「もしよかったら、土曜日観光に連れて行ってあげるよ。」

「でも悪いんじゃないか？」

「大丈夫だよ。海藤君のことも知りたいし。」

「わかったよ。ありがとう」

「うん、じゃあ10時に駅前ね。」

「ああ」

と言うと近藤は自分の席へ戻った。

後ろからなんか変な視線を感じたが気のせいか・・・いや気のせいではなかった。

小鳥坂が疑わしい目で俺を見ている。目があうとあいつは目をそらした。

・・・

・・・

キンコンカーンコン

学校の終わりのチャイムが響く。

下駄箱に行くと昨日と同じ場所に小鳥坂が居た。しかもとてもお怒りのようだった。

だいたい起こっている理由はわかった。

「ご・・・ご機嫌いかがでしょうか？・・・」

と俺は聞く。

「あんたね・・・まあいいわ 帰ろうよ。」
と小鳥坂は言う。

夕日がこの街を照らしている頃、俺と小鳥坂はいつもの道を下っていた。

「あんた、あの女とどういう関係なのよ？」

と小鳥坂は聞いてくる。

「え？しらねえよ。今日突然声かけられたんだからよ。」

「それもそうよね・・・あんた女運なさそうだから・・・」

と言われる。

「でもあの女は学校でもモデルって知ってた？」

と小鳥坂に聞かれる。

「知るわけないじゃねえか。だからなんだっていうんだよ。」

「まあいいわ・・・ あんたは知らない女でもどこかへ一緒に行く
タイプの人なのね・・・」

と小鳥坂はいい

「私、こっちだから・・・じゃあね。」

と言い帰っていく。

「おい!!」

と俺は言うが小鳥坂は走って行った。

家まであと3分ぐらいだった。

俺は小鳥坂に勘違いしてもらっては困ると思った。

もちろん好意なんてない。むしろ好意があっではいけないんだ。俺
は自分に約束したんだから・・・あいつに・・・

・
・
・
・
・

「ただいまー」

と俺は家に入る。 ミイナに鍵を持たせておいたから家には入れていた。

「おかえりー」

と奥の寝室から声がする

寝室と言ってもミイナの部屋になっている。 俺はリビングのソファで寝ている。 もちろん部屋もない。

俺たちの家にはトイレ、風呂、リビング、ダイニング、寝室しかないからだ。

部屋はあの時に散らかされたがどうにか昨日2人で片づけた。

「ねえザックス。今日のご飯は？」

「適当に作るわ。材料もあまりないし。」

「じゃあさ買い物行こうよ！」

「んー。大丈夫だ。どうにかな。」

「ひどいよ！ザックス！！」

「また明日にしようじゃないか。」

「わかった・・・」

と不機嫌そうにミイナはいいリビングでテレビを見ている。

俺は昨日かった野菜を適当に取出し適当に炒めて料理を作った。

そして30分ぐらい料理をしていた。

「ミイナ、運んでくれ。」

と俺は言う。

「わかったー」

とミイナはテレビを見ていたのを邪魔されたように言う。

「さすが、男料理だね。」

とミイナは言うが

「男料理をなめんじゃねえぞ。」
と俺は言う。

そして俺は食べ終わった後、食器を洗いミイナを寝かせつけ宿題をし寝ようとしていた。

「近藤か・・・確か土曜日だったけな・・・」

・・・
・・・

金曜日。

やけに小鳥坂の機嫌が悪かった。やはり気にしているのかと思ったがそっとしておいた。

近藤は俺とすれちがうと笑顔でウィンクし「明日楽しみにしている」という感じな顔をしていた。

そして家に帰り飯を作り・・・いつもより早く寝付いた。

・
・
・

土曜日。

ミイナは裕太たちの家に預けてもらうことにした。

あいつらはすぐに理解をしてくれたからだしもし何かあったときに助けることが出来るからだ。

でも、ミイナはせっかくの土曜日だっていうのに俺に会えないのを怒っていた。

そして少し早めに駅前へ着いた。

土日だから通勤ラッシュではなかったが部活などで使う人で多かった。

「ごめん、遅くなった。」

と俺は声を掛ける。

「うんうん。大丈夫だよ、私も今来たところなの。」

と言う。

「じゃあこの電車に乗って都心まで行こうか。」

と近藤はいい都心まで2人で行く。

「あの・・・近藤さん・・・」

と俺は声を掛ける。

「真菜でいいわよ。」

「それじゃ・・・真菜・・・今回なんで俺を誘ったの？」
と俺はストレートに質問をする。

「ああ心配してたの突然で？ 私、海藤君が早くこの街に慣れても
らいたいなーって思ってたね。」

と真菜は言う。

「そっか・・・ありがとう・・・」
と俺は言う。

「まだ終わってないよ。 おもしろい。」
と真菜は笑いながら言う。

着いたのは東京駅だった。

「うわぁーすごい人の数・・・」
と俺は驚く。

「この駅は数えきれないほどの電車が止まるからね。」

と真菜は言う。

俺は日本の事をよく知らない。だけど、これはばらしてはいけない
と思い真菜には知ってるふりをして会話をしていた。

2人はそのあと浅草や秋葉原など色々周っていた。次第に二人は
笑顔で会話をしていてとても楽しかった。

その頃、裕太の家にはミイナが居た。

ミイナは裕太のレースゲームでみんなで楽しんでた。

「ミイナ。今度はぜってーまけねぞ!!」
と裕太は言う。

「私だって負けないんだから!」
とミイナは言う。

「私もよ!」
と綾乃も言う。

そしてミイナは突然嫌な予感を察知した。

「ザックス・・・ザックスが・・・」

とミイナはそんな予知夢をふと見ていた。

ミイナはトイレに行くふりをしてゲームを中断し外へ出て行った。

もちろんミイナはこの街の道の事も知らない。ただ体が呼ばれる方へ向かっていった。

2時ぐらい。

少し遅れ気味の昼ご飯を取った。あんまり食べ過ぎてもと思い家から近くのハンバーガーのチェーン店に入った。

「いや～今日は楽しかったな！」
と俺は言う。

「うん、私も。　ねえねえこの後どうする？」

まるでカップルのような会話をしていた。

あいつのことを忘れたように。

「ちよい、トイレ行ってくるわ。」
と俺は言う。

「うん。」

俺はトイレへ行った。そして慣れていない携帯にメールが来ている

ことに気付いた。

「あれ、メールってどうするんだっけ・・・」
と俺は考えながらメールを見る。

メールは裕太からだった。

内容は。

「デート中すまんよ。ミイナが消えたんだ。すぐに探すのを手伝ってほしい。」

とのメールだった。

俺はすぐにミイナを探しに行こうとしていた。

・・・

そのころミイナは走り続けていた。

「(ザックスが危ない・・・)」

と思っていた。

するとミイナはある人にぶつかった。

ドーン

「いてて・・・」

とミイナは言う。

「ちょっと・・・大丈夫？」

とその人は話しかけてきた。その人は小鳥坂だった。塾帰りで自転車に乗っていた。

「あの・・・この近くのハンバーガー店を教えて！！そうしないと・・・ザッ・・・こ・・・考樹が・・・」

小鳥坂はその名前にピンときた。

「わかったわ・・・行きましょう。」

と小鳥坂は自転車の後ろにミイナを乗せてとりあえず近くのハンバーガー店まで向かっていった。

・・・
・・・

その頃ザックスはトイレから出て席に戻ろうとしていた。

しかし、外の静けさに気付いた。あまりにも静かすぎていた。

そして一人の女の悲鳴・・・

「ま・・・真菜!？」

と俺は走ってトイレを出て上の階に行く。

「真菜!!」
と俺は叫ぶ

「ようやく現れたな・・・ザックス・アンドレス・・・」

と男が言う。男は真菜を人質にしている。

「てめえ・・・そいつを離せ。」

という。

「それは出来ないね。離してほしいなら・・・お前の命を頂こうか!？」

と男は言う。

第4話（34話）目標（前書き）

☆この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。☆

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかったら、評価・感想・お気に入りをお願いします。

第4話（34話）目標

4話

イギリス・術者狩りの集まりにて

「なるほど．．．目標の物がここにはいないとはな．．．」

「どうやら逃げたみたいらしい。要するにここを探すのは無駄ということでは？」

「そういうことになりますが．．．もう見つかったという報告です。それに目標の物と考えられないものが一緒にいるということで私たちの奴らはもうその場所へ向かってますよ。」

「その考えられないものとは．．．」

「もうお忘れのことかもしれません．．．」

．．．
．．．
．．．

「何のつもりだ．．．いってみろや．．．」
とザックスは言う。

「決まってるだろ。君の前に現れてこんなことをするってことは．．．
わかってるよね．．．」

と男は言う。

「てめえ・・・」

俺は思っていた。ここで攻撃をしまえば真菜にばれてしまう。これは春田との約束だ・・・ばれては・・・

真菜は泣きそうな顔で助けを求めている。

「うち・・・どうということ考えてるかしらねえが!!」

俺は術を使わずに攻撃しに行った。

「僕に勝てるかと? そんなことで?」

ザックスは殴り返れる。

「(鉄!?)」

と俺は思った。

「(こいつは術師か・・・)」

と俺は思う

「まあまあ、術者だと思って驚いているのかい? 術者狩りは術者もいるんだよ。でも、僕はもっと強い力が欲しい。だから俺が前を・・・」

とザックスに思いっきり攻撃してくる。

その時だった。

相手の攻撃がザックスの目の前で止まった。

「あんた？何してんの！ 早く行きなさいよ！」

と小鳥坂は言う。小鳥坂はカードを持っている。そこにはミイナもいた。

「お前・・・」

「説明は後でするわ。とりあえず真菜は眠らせておいた。もう思う増分にできるんじゃない？」

と小鳥坂は言う。

「なるほど。術者狩りさん・・・ これでバトルが出来るってわけかぁ・・・」

とザックスは目を赤くなったように言う。

そしてザックスは闇術を使い攻撃する。

「なに！？」

ドーン

・
・
・

「ふう、どうにか気絶程度にはしておいたが・・・」
とザックスは言う。

「しかし、あいつは鉄術師だがなんでほかの客を眠らせることが出来たんだ？」
とザックスは聞く。

「最近は何術師の中でも催眠液などが売られたりしているみたい・・・」
と小鳥坂は言う。

「そうか・・・ところでなんでここにいるんだ？」

とザックスは聞く。

「あんた・・・それ最初に聞くんじゃない？ この娘、私が塾帰りに会ったの。助けを求めていたから色々聞いてみるとあんたの事を聞いたから急いでここまで来たのよ。」

「そうか・・・まあありがとな・・・」
とザックスは言う。

「別に・・・ところで聞きたいことがあるんだけど？ この娘はあなたのなんなの！？」

とストレートに小鳥坂は質問してくる。

「いや・・・その・・・なんていうかな・・・妹というか・・・」

とザックスはごまかす

「こんなに似てない妹がいるのかしら？ あんたに違ってかわいらしいのに。」

・
・
・

ザックスは現場を後にし家へ小鳥坂と向かった。そしてイギリスの事からここにいる理由まですべてを小鳥坂に話した。

「なるほどね・・・ 要するに海藤は由紀の面倒を見てるわけね。」

「そうだ・・・ ところで・・・ お前はカードを使う術なのか？」
とザックスは聞く。

「そうよ。カードにはいろいろ種類があるんだけど1回使えば消えるの。私の体力ともリンクされてるから使いすぎると死んでしまう訳。人を眠らせたり攻撃をキャンセルしたりできるの。だからあんたより強いのかしら？ あんたは攻撃を見てると闇術師なのね。イギリスの闇術師ね」 ところで由紀は？」

「私は・・・ 水術師だよ・・・」

とミイナは言う。

「水ね・・・ 由紀はまだ小さいのに・・・」

と小鳥坂が言った時ザックスは少しびくっとしていた。

そして小鳥坂はザックスの夕食を食べて夜8時ごろに帰って行った。

小鳥坂が帰った後、俺は真菜のことを少し考えていた。小鳥坂の母さんと真菜が友人だったから真菜は疲れて寝てしまったと言い家に送っていった。

絶対に明後日今日の事を思っているだろうなーと思った。

・・・

・・・

月曜日。

「おはよー海藤！！ 昨日も爆発事故だったよ。しかもこのあいだと同じ現象が起きてるらしいぜ。ほんと、困ったもんだな。」

と斉藤は言う。

「そうかいそうかい。それは大変だったな。」

と俺は適当に会話する。どうせ俺のことだと思っていた。

いつも通り下駄箱に行く。

靴を履きかえようとしたとき真菜がやってきた。

「お、おう・・・ そういえばこのあいだはごめんな・・・」

と俺は素直に話す。

「うんうん。私は大丈夫だったよ。それと・・・助けてくれてありがとね・・・何が起きたかわからないけど・・・きっとわからない方がいいんだよね・・・」

と真菜は言う。

「そうだな・・・そうしてくれたら助かるな。それとお礼ならあいつにも言っておいてくれ。」

とザックスは下駄箱で待っている小鳥坂を指さしながら言う。

「うん。わかった。」

と真菜は言う。と小鳥坂のところに言う。

小鳥坂は俺を横目でにらんでいる。

俺は少しその目が怖かったが・・・

・・・

俺はこの日先生に高1の勉強をしていないからこれから居残りをして帰ることになった。

だから小鳥坂と一緒に帰ることもなくなった。

そして1時間ぐらい先生と居残りをして学校を出たときそこには裕太が待っていた。

「よ！闇術師さんよ！」

と裕太は言う。

「おい、その呼び方やめろや。お前なんでここに来てんだ？」
と俺は聞く。

「まあよそんなことどうでもいいんだがな。ちょっとついてこい。」
と裕太に言われ俺は近くのコンビニにいつて今俺のマイブームのフルーツミックスを買いコンビニの前で裕太と話している。

「さてと、話があんだけど・・・これは極秘で入手した情報なんだが・・・聞いてほしいんだ。」
と裕太は言う。

「なんだ？」
と俺は言う。

「術者狩り達はどうかイギリスに標的が居ないということを知つて標的を日本に変えたらしいんだ。その標的をみんな狙っているみたいだな。それにお前は一昨日も術者狩りに会ってるはずだろ？もうここらへんにいることは全てばれている。」

「おいおい、待てって。お前、その標的が俺だというのはか？」
と俺は言う。

「まあそれもそうらしいが、どうやらまだあるらしいんだ。そいつらが言うには・・・今までも見たことのない力だってな・・・なんか知っているか・・・」

「そんなばかな・・・もう一人・・・待てよ・・・」

と俺は思う。

「（ミイナはそんなすごい力を見たことがない・・・だけどボスは俺とミイナを日本に送った。それって・・・）」

「なんか知ってるか・・・」

「ミイナだ・・・ミイナに違いない!!」
と俺は言う。

「そうか・・・ならば術者狩りが引くまで気を付けた方がいい。日本もそいつらを入国させないようにするらしいが日本にはもうすでにたくさん術者狩りがいる。」

「わかった。俺も注意をするわ。」

とザックスは言う。と裕太は塾があるからと言い帰って行った。

俺はなんとなくミイナが心配で家へとダッシュで走って行った。

そして急いで部屋に入って行った。

「ミイナ!!」

「ど・・・どうしたのよ・・・」

「よかった・・・」

とザックスはほっとする。

「どうしたの急に？ 気持ち悪い・・・」

とミイナは言う。

「気持ち悪い言うなよ・・・ ところでお前このあいだは俺のところに来れたとは予知能力が復活したのか？」

とザックスは言う。

「それが・・・その時急に見えたの。でも後は・・・何も見えな
いの。」

とミイナは言う。

「そうか・・・もし何か見えたら・・・言ってくれよ・・・それと・・・これからいろいろとトラブルに巻き込まれるかもしれないんだ。だけど俺はお前を守るからな。」

とザックスは言う。

「大丈夫だって！ ザックスに守られなくても自分で守れるんだからね！ 逆にザックスを守るんだから！」

とミイナは言う。

「そうか・・・じゃあ飯作るか・・・」

とザックスは言う。

もうその頃には術者狩りが到着していたんだ。

・・・

・・・

飯を食べ終わった後、ならない携帯に一通のメールが届いた。

メールは教授の春田からだった。

内容は明日12時に駅前のテニースにミイナなしで来てほしいという事だった。

俺はその約束を忘れないようにして眠りについた。

— e n d —

第5話（35話）オリジンパワー（前書き）

☆この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。☆

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかったら、評価・感想・お気に入りをお願いします。

第5話（35話）オリジンパワー

12時に約束の場所。

ミイナは家で留守番ということにしておいた。

10分少し早くその場所へ行った。俺はだいたいどんな話をされるかわかっていた。

きつとあのことだ。

「いらっしやいませー 1名様でしょうか？」

と店員に聞かれる。

「いや、もう先に友人が待っているんで・・・」
と俺は言う

「あ、それならあちらのテーブルになります。」

と言われ案内される。

「あっ海藤君！！こっちこっち！！」

と大学教授の春田が呼ぶ

春田は大学でこの人体実験の事について調べていた。春田は昔イギリスの大学で人体実験の手伝いをしていたんだ。しかし、人体実験があまりにも危険すぎることを知って反対側に向かうと実験チーム

からは追い出され今ではこの実験をどうすれば止めれるかを研究している。

「どうも、久しぶりというところか・・・」
と俺は言う。

「そうね・・・まあもう少し慣れたところに呼びたかったのだけど・・・」

と春田は言う。

「だいたい言いたいことはわかっている。術者狩りのことか。」
と俺は言う。

「まあね。きっと裕太たちから聞いたのでしょいうね。」

「あいつらのこと知ってるのか？」

「まあね。実験の時は関っていないけどあの子たちには助けられたから。」

「ええそうよ。あれは5年前ぐらいの話。私はイギリスで研究をしてたけど日本へ返されたのは知ってるよね？　もうその頃は日本に術者狩りというのが居たのよ。私は研究グループでも結構トップな所にも言ったからだいたいあなた達の術の構造は知っているんだわ。それを知った術者狩りは一気に私のところへ近寄ってきたの。」

その時に命を失いそうになって・・・　だけどそれを助けてくれ

たのはあの子たち。 命の恩人だわ。」

と春田は説明する。

「自分で作った道具に助けられたわけな。」
と俺は言う。

「ちょっとー 私は研究だけを少しでも助けただけよ？」

「まあ分かってる。お前の判断は間違っていないっていうことはな。
もちろん騙されていたってことも」

「ありがとう。理解してくれて。 それより話なんだけど・・・
術者狩りの事」

と春田は小声で話す。

「今のところ狙っているのは・・・あなた・・・じゃなくて・・・
・由紀ちゃんの事。」
と春田は話す。

「由紀？ああミイナの事か・・・っておい！なぜだ？」

と俺は大声でいう。

「ちょっと声がでかい！ 何か由紀ちゃんのことについて知っていることある？」

「・・・ あいつの術については良くわからないな・・・」

「そうなのね・・・ どうやらあの娘、すごい力を持っているらしいわ。術者狩りが狙うぐらい。」

「それなら・・・お前が情報を持っているんじゃないのか？」

「持ってたは今頃動いてるわよ。そこが謎なの。私の推測だけど・・・ あの娘はもともと術を持っていたのではないのかと？」

「そんなのあり得るわけないだろ！！ お前、イギリスのデータベースも調べたのか？」

「ええ、もうやったわよ。だけど実験リストには載っていないわ。むしろあの娘の年だと・・・もう実験はちょうど終わっているわ。」

「うそだろ・・・そんなわけ」

「もしあり得るとしたら・・・由紀ちゃんは術の起源『オリジンパワー』の持ち主なのかもしれない。」

その力があれば・・・この世界なんて破壊は簡単よ・・・」

「ここで調べることはできないのか？もし、あいつの身になにかあれば・・・ 早くそれが違うことが証明できれば・・・」
と俺は言う。

「それも考えたけど・・・今はとても危険だわ。もし検査中に機械でも乗っ取られれば術だって引き出すことが出来る。そしてその人の術にでもなってしまうわ・・・」

「術者狩りは今どうなっているんだ？」

「多分必死にあなた達を探しているわ・・・一刻でも早く見つけて・・・殺し・・・」

と春田は下を向きながら言う。

「わかった。ありがとう・・・また何か分かったら連絡してくれ・・・」

「あなたも気を付けてね。本当に。」

といい俺は店を出る。

「(ミイナが『オリジンパワー』を持っているだと・・・オリジンパワーはもうこの世の中にはないと聞いていたが・・・)」

と俺は思いながら走って家へ向かった。

家まで500mというところで嫌な予感がした。

「ミイナ!?!」

俺は急いで家へと向かった。

・・・

家に着いた。家からは煙が出ていた。

扉が完全に壊されていて他のアパートの住民は外へ避難していた。

俺は住民の人にすぐに聞いた。

「すみません！いったい何が。」

「俺もよくわかんないが・・・ちょうど家に着いたときドーンって音がして・・・外を見たらこの通りだよ。」

「警察とかは？」

「もうすぐ来るらしいけど・・・どうやら人質みたいでな・・・」
俺はすぐに部屋へと向かった。

「（ミイナが・・・ミイナが・・・）」

なかは煙で見えなかった。

もっと部屋の奥に向かうと女とミイナが居た。

「おい！てめえ・・・ミイナから離れろ！」

と俺は叫ぶ。

「あらあら・・・ザックス・アンドレスね・・・待っていたわ。」

と女は言う。

「お前の狙っているものはわかっている・・・黙って離せよ・・・」

「それは出来ないわ。あなたはわからないかもしれないけどもし私

を殺せても次を待っている人はそこらへんにたくさんいるわ……
だからおとなしく私に殺されるのを推薦するわ。」

「うち……みんなここまで来ているって訳なんだな……」

と俺は言う

「逃げ道がねえのなら……ストレートにいくぞ!!」

といい俺は攻撃をしていく。

「ダークボール!!」

「少しだけ相手をしてあげましょうか……消えろお!」

「私の剣を壊せることができるかしら……」

と相手の女は攻撃を剣で止める。

「何? 剣術師か……」

俺は手から出血していた。

「ザックス!!」

とミイナは叫ぶ。

「おやおや早速私の攻撃が効いたかしら…… 私のスピードに
着いてこれるかしら……」

と女はいいとても速いスピードで剣を振ってくる。

「何・・・見えない・・・」

とザックスはどうにか避けていく。

その時だった目の前に何かのカードが地面に落ちた。

「(なんだ?)」

と俺は思う。

「考樹！これを使って!!」

と小鳥坂は言う。

カードからは剣が出てきた。どうやら道具カードだ。

「わかった！ありがとな！」

と俺は言う。と小鳥坂はミイナのところへと走って行った。

「私の獲物に手を出すんじゃない！」
と女は言う。

「お前の相手は俺だっていつてんだろおが!! 他の奴に手を付ける暇でもあんのか？」

と俺はいい剣で攻撃をとめる。

「(なによ・・・この剣・・・見たことないわ・・・まさか術が剣を取り巻いているとでも・・・)」

と相手の女は言う。

「どうやら本気の様ね。私はアンナよ。名前を言ったからにはあんたを殺すわ・・・」

とアンナは言う。

・・・

その頃小鳥坂はミイナのロープをほどこき1. 5?ぐらい走って人目のない少し暗いところに逃げていた。

「もう大丈夫だよ・・・」

と小鳥坂は声を掛ける。

「ありがとう・・・姉ちゃん・・・あのさ・・・ごめんね。」

とミイナは言う。

「謝る必要なんてないわよ。あいつはやってくれるわよ。」

「そうじゃないの。」

とミイナは言う。

「ザックスが追われているのは私のせいなのよ・・・ 私があんな力さえ持っていなければ・・・ 奴らの目的はほとんどが私なの・・・ 私が着いて来たりしたから・・・」

「そんなことないわ。その考・・・いやザックスはあなたを絶対守るわよ。あなたが悲しむ必要なんてないわ・・・」

と小鳥坂は言う。

「よおお嬢ちゃんとオリジンパワーよ・・・」
と若い茶髪の男が声を掛けてくる。

「あんたは誰よ・・・」
と小鳥坂は言う。

「ははは、術者狩りだよ。オリジンパワーを狙っている・・・」
と男は言う。

「由紀、動かないでよ。」
と小鳥坂は言う。とカードを出す・・・

「(しまった、今カードは使えないんだ・・・考樹が使っている・・・)」

「どうしたんだい!?!まさかカード術師さんかい?」

と男は言う。

「(でも由紀を守らなきゃ・・・)」
と小鳥坂は思う。と素手で攻撃をする。

「うおおおおおお」

しかし小鳥坂の攻撃は素手で止められて弾き飛ばされる・・・

「もうやめて・・・」

とミイナは心の中で叫ぶ。

「はっ・・・もういちどおとお」

と小鳥坂は向かうが

「おいおい、そんな攻撃でいいのかい？俺の力にはかてねえぜ？
おらよっ」

と男は小鳥坂を蹴り飛ばす・・・

「うっ・・・まだまだこんなじゃないわよ・・・」

と小鳥坂はもう一度攻撃をする

「だから・・・今度はほんとに死ぬぞお！」

と男は言う

「（死ぬ！？）」

とミイナは思う。

「（みんな私のために・・・私のために・・・もう私も・・・）」

とミイナは思う

「水の神よ・・・私たちに逆らう物を全てこの世から消しあの2人を救い出よ。」

とミイナはいつもと違う声で言う。

「どうしたのよ・・・」

と小鳥坂は言う。

「ぐうおおおおおおお」

とミイナは言う。とミイナの手から大きな水の玉がいくつも出ていた。

「ウォーターカッター・・・水の神よ 奴を全て粉々に刻めよ」

とミイナは言う。と大きな水の玉は空を飛び相手の男の頭の上から早いスピードで落ちて行った。

「なに!？」

そして男は見ぬうちに水によって粉々になっていった。

するとミイナは倒れた。

「由紀!！」

と大声で小鳥坂は言う

・・・

その時ザックスはアンナと戦っていた。

「どちらもぼろ雑巾みたいだなあ・・・」

と俺は言う。

「最後は・・・綺麗に決めましょうか・・・覚悟するがいいわ・・・」

とアンナは言う。

「っふん・・・いいだろ・・・俺はいつも命懸けだからな・・・」

というと2人は剣を構えていた

その時向こう側から何かが降ってくるのが見えた

「なんだあれは・・・」

と思っていたとアンナはすでにこうげきをはじめていた。

「まずい・・・」

キーン

・
・
・

「うっ・・・　うわあああああああ」

とアンナは声を上げていた。

何が起こったんだとその時は思っていた。

水は光のように襲ってきた。

「なんだ・・・これは・・・」
とザックスは思う。

すると向こう側からミイナを背負った小鳥坂が走って来た。

「考樹ー!!」

と小鳥坂はやってきた。

・
・
・
・

俺の家。

「全く・・・一人で暴れまわるんだから・・・」

と小鳥坂は手当てしながら言う。

「いって・・・もっと優しく扱ってくれよ。」

「うるさいわね!! ところで・・・あんたの相手も水の玉みたいので死んだの?」

「ああ・・・確かにあれはそうだ・・・」

「それなんだけど・・・どうやら・・・由紀ちゃんが出したみたいで・・・」

「由紀が!?!」

「うん、確かあの男がオリジンパワーって言ってたわ・・・」

「やはり本当なのか・・・」

「何か知ってるの?」

「知ってるも何も奴らの狙いはこいつなんだ。この力を狙っている

んだ。」

と2人は話す。

辺りは陽が暮れて行った。

あれから俺は廊下で寝て小鳥坂とミイナはリビングで寝ていた。

朝目が覚める・・・

「(うう・・・なんでここで寝ているんだ・・・そうか・・・あいつが来てるんだ・・・)」

と俺は思うと向こうから走ってくる音がする。

「考樹く!!」

と俺を踏みながら走っていく。

「おえ!! お前踏むなよ!!」

「それより・・・由紀ちゃんが!!」

・・・

どうやら由紀は外へと出て行ったみたいだ。

俺たちは裕太たちにも協力をしてもらい探すことにした。

もう2時間も探していた。

さすがに心配だった。

「後探していないのは・・・あの公園か・・・」

と俺は公園へ向かった。

するとミイナはブランコに乗っていた。

「ミイナ!!」

と俺は叫ぶ。

「ザックス・・・」

と小声で言う。

「よかった・・・ここに居てくれて。。。」「俺は言う。」

どうやら色々歩いていたらここに着いたらしい。

「さあ家に帰ろう。小鳥坂も来てるぞ。」
と俺は言う。

「ねえザックス・・・ごめんね・・・」
と泣きそうな顔でいう。

「どうしてだよ・・・」

「私さえ一緒に居なければ・・・ザックスはこっちでもっと楽しく生活できたんだよ・・・だけど・・・私のせいで・・・もう、私はここに居ちゃいけないんじゃないかなって・・・だから私を先にイギリスへと・・・」

「それはできねえな。」
と俺は言う。

「俺は一つ約束をしていてな。俺はお前と約束をした。お前を何からも守るとな。どんな力を持っているか知らんが・・・俺はお前を誰にも傷つけたりさせねえ。もちろん俺だけじゃないんだ。小鳥坂も裕太も綾乃たちもそうだ。だからお前は何も思う必要はない。勝手に死ぬんじゃないやねえぞてめえ。」

と俺は言う。とミイナは笑顔になっていた。

「うん！」

公園の外では小鳥坂達が聞いてた。

・・・

キーンコーンカーンコーン

「海藤！おはよっす！！一昨日も事件があったとはな・・・ほんとこの街は荒れてきたなー」

と斉藤がいつも通りに話す。

「みんな思春期だからそんな事件が起きてんだよ。ちょっと我慢してやんな。」
と俺は言う。

「いみわかんねーよ」
と斉藤は言いながら下駄箱へと行く。

そこには小鳥坂が待っていた。

「よお・・・考樹・・・」
と小鳥坂は小声で恥ずかしそうに言う。

「（名前で呼び合うだど!?!）」
と斉藤は思う。

「なんでしょうか小鳥坂さん。」

「人が名前で呼んでやってるのに名字で返すのはないでしょ!?!」

「名前覚えるのめんどくせーよ。」

「あんたいい加減にしなさいよ・・・それより・・・昨日は見つかってよかったね・・・」

「おう。ありがとな。」

「あんた、本当に由紀ちゃんを守ろうと思ってるの?」

「はあ? もちろんだよ。俺はもう何もなくなたくねえからな。」

「ふうん この変態ロリコンが！」

と小声で言う

「ロリコンじゃネエよ！」

といつも通りの会話をしていた。

— e n d —

第5話（35話）オリジンパワー（後書き）

◇最後まで読んでいただきありがとうございますもしよかったら、
評価・感想・お気に入りを宜しくお願いします。

第6話(36話)コントロール(前書き)

ネットの調子が悪かったため更新が遅くなりました。

☆この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。☆

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかったら、評価・感想・お気に入りをお願いします。

第6話(36話) コントロール

36話から

俺はミイナが特殊能力を持っていることを知ってから考えていた。

後から聞いた話だがミイナは水の能力だけではなくほかの能力も持っているらしい。

すべての起源だと春田は言った。まだミイナは水の能力しか発揮をしていないらしい。

ミイナがこの間みたい有能力が体を動かせば誰も勝てなくなるそう
だ。

これも春田から聞いた話だがこの力が見つかった理由は昔話にある。

とても貧乏だった村は家をたくさん建てるために多額のお金を隣町から借りたんだ。

その村はみんなで農業や商業を頑張る借金返済することになった。

しかし、隣町の借金取りはそのお金を素直に受け取らなかった。

そいつらはお金が足りないと村人たちを騙す。

そいつらはお金で返せねえのなら命で返してもらおうかと言いい村人
たちを殺そうとした。

その時少し厚めのコートを着た旅人が村人の前に現れた。

その男は空を一気に暗くしある力で借金取りを消してしまう。

そんな話は誰も信じなかった。しかし、その話を信じて能力を探し続けた男がいる。

そいつはなんとその能力をとある人から見つけ出した。

そしてその能力をイギリスのために能力を抜き出しコピーを作り俺たちの体に組み込まれているわけ。

「ねえザックス、もうお昼だよ。」

と考え事をしている俺に話しかけるミイナ。

「もうこんな時間か・・・何も用意していないから外で食うか」
と俺はいい日曜の昼は外で食べることを決めた。

土曜は補修が入っているからミイナには留守番してもらってたもんでたまにはいいだろう。

しかし、術者狩りはミイナを殺してどうやって力を抜くのだろう。
ミイナが死んだら能力も死ぬんじゃないか。そして、俺を狙っていた理由は何なんだ。俺はもちろんオリジンパワーなんてもっていない。

意味があるのか・・・

「これほしいー！」

と某ハンバーガー店で注文が回ってきた。俺はまた考え事をしてい

た。

ボスは知っていたんだ。ミイナがどんな力を持っていたとどれだけ狙われているかを・・・

「あの・・・ザックスさん？」

と後ろから声を掛けられる。

ついイギリスで呼ばれていた名前だから後ろを振り向く。

「お久しぶりです。あの・・・綾乃って言ったら・・・」
と綾乃は言う。

「ああ・・・あん時の・・・昼飯かい？」

と俺は尋ねる。

「ええ、なんか勉強はかどらなくて・・・」

と綾乃は言う。

・・・

俺たちはいろいろと話を聞くために一緒に昼飯を食うことにした。

「学校はどうですか？」
と聞かれる。

「ああ、あんなに大勢だったのには驚いたよ・・・」
と俺は言う。

「ミイナは？」
と聞く。

「うん。向こうとは全然違ったね。」
と答える。

「なるほど」 あ、そういえば私自己紹介していなかったですね・・・
・ 私は神谷 綾乃です。術は超音波を使います。」

「電波とは違うのか？」
と俺は聞く。

「微妙に違うんです。電波の方が威力は強いのですが超音波はスピードが速いのです。」

「そうなんだ・・・難しいな・・・」

「超音波か・・・」
とミイナは静かにつぶやく。

「どうしたんだ？」
と俺は聞く。

「あ・・・なんでもないよ・・・」
とミイナは言う。

「それじゃあ私行きますね・・・宿題があるので・・・」

と綾乃は言う。と俺の頭に何かのメッセージが送られてきた。

「（夜7時にここ・・・あなただけで。）」

「よろしくです」

と綾乃は言う。と店を後にした。

「ミイナ、食料買って帰るか。」

と俺たちも店を後にする。

・
・
・

夜7時 さっきの店。

「よかった。あなたに通じて。」

と綾乃は言う。

「ああ、どうにか通じたぞ。」

と俺は言う。

「話があるのですが・・・あなた達はいろんな人から狙われているのは知ってるでしょう。」

「ああそうだな。」

「狙われているのはあなた達だけではありません。私たちもです。」

と驚きな発言を聞く。

「要するに……術者狩りは術を持っている人ならだれでもいいのか？」

と俺は聞く。

「それはもう昔の考えだそうです。　どうやら術者狩りの間で何らかのゲームが開催されてるみたいでその内容が……」

と俺は耳を傾ける。

「……術者を全て殺す。」

と綾乃は小声で言う。

「そうすれば永遠の術が手に入れられるというらしいです。」
と綾乃は言う。

「そんなばかな……　だれがそんなの作ったんだよお？」

「私が思うには術者狩りをまとめていてこの力を開発した人だと思います。」

と綾乃は言う。

「なんで開発した人なんだ？」

「どうやらその術者狩り達……　命と仮の術を交換しているんです。私たちは命と術を両方持っているので術がなくなっても生きることが出来る……しかし、その術者狩り達は片方しか持っていないので術がなくなれば死亡……　ですから死ぬ気がかかってくるでしょう……　そんなことができるのは開発者しかないのです」

はと・・・」

「そんなゲームはおかしい！　いくらなんでも・・・　その開発者を殺しに行った方が早いんじゃないネエのか？」

「わかっていればそんなことはもうしています！」

と綾乃は言う。

「とりあえず今でも狙われているということは知っててください。」

と綾乃は言う。

「それじゃあまたどこかで会いましょうね。」

といい店を後にする。

「周りに狙われているか・・・」

とおもいながら帰宅する。

そして次の日のあさ・・・

「海藤よー！おはようー！！　今日は修学旅行の班決めだってよおー！！」

と斉藤は言ってくる。

「修学旅行？旅行でもスンのか？」
と俺は聞く。

「何をいつてんじやい？ 旅行だよ旅行。クラスでいくんだぜ！！」

「そんなイベントがあったのかぁ・・・」
と俺は思う。

・
・
・
・

席に着くといつも通りの光景だった。小鳥坂が机に座ってまだ出ていない宿題をしている。

斉藤は俺の隣でなんかを喋っているがどうでもいい内容だもんで適当に聞き流している。

そして6時間目の総合の授業。

修学旅行の班決めだった。そもそも修学旅行の意味を知らなかったがどうやら北海道へ行くらしい。

「おい、斉藤。北海道って一番北のところだよな。」

「そうだぜ。夏だからちようどいい気候らしいぜ。」
と斉藤は言う。

「めんどくせえな」

「まあまあ、高校生活の最後のイベントなんだからよー！！」
と斉藤はいい俺たちは下校準備へと入った。

その日はいつもみたいに小鳥坂は待っていなかったので一人で家に変えることにした。

「ただいまー」

といつも通りに家に向かって言う。

「ねえねえ、今日さ、友達の家についていい？」

とミイナは聞く。

そういえばミイナが人の家に遊びに行くなんて聞いたことなかったなと思った。

「ああいいんじゃない？」

と俺は言う。

「ヤッター！！じゃあ準備してくるね！！」

とミイナはいった。一応、人の家だから俺も家の前までは連れて行くかと思ってている。

・
・
・

俺はミイナを友達の家まで連れて行き家に帰るのがめんどくせーなーと思いながら散歩をしていた。

「今日の晩飯の材料でも買いに行くかー」と思いながらスーパーへ立ち寄る。

いつも通りに材料などを買っているとどこかで見慣れた顔の人が居た。

誰だろうと思いつながら見ているとその人と目があつた。

「あなたは・・・」

と声を掛けられる。

「あん時の・・・ 裕太たちの・・・」

「あんまり馴れ馴れしく話しかけるのやめてくれませんか・・・
急いでるんで・・・」

と相手は言う。

「おいおい、どういうことだよ？ 確か透哉だっけ・・・」

「名前を呼ぶのはやめて下さい！ そして僕の名前をすぐに忘れて下さい。」

というとすぐに行ってしまった。

「なんだよ・・・ あいつ・・・」

と俺は思いながら買い物再開する。

すると魚売り場の前にいつも通りに小鳥坂が居た。

「（またあいつか・・・ いつもいるな・・・）」

と俺は思いながら

「おい、小鳥坂。」

と声を掛けると。

「うわぁ・・・なんだ・・・あんたね・・・」

と小鳥坂は言う。

「なんだよって失礼だな・・・」

と俺は言う。

「うるさいわね・・・ そうだあんたに聞いてもらいたい話があるんだわ・・・」

と小鳥坂は思い出すように言う。

「術者狩りについてはもう知っているわよね・・・ どうやらその術者狩り・・・ここ数日間でも勢力を付けているわ。あんたもいつ命がなくなってもおかしくないわ・・・」

と小鳥坂は言う。

「そうか・・・ 意外と早かったんだな。」

と俺は言う。

「あんた・・・冷静ね・・・」
と小鳥坂は言う。

俺はレジに向かいながら

「俺が犠牲になるだけであとが普通になるんならそれはそれでいいんだ。ま、そんなことにはなりたくないがな・・・また明日な。」

と言いながら俺は店を出る。

「バカはあんなことしか考えれないのかしら・・・」
と小鳥坂は思う。

・・・

そのころ透哉は店の帰り道を歩いていた。

すると偶然、透哉は少し大きい公園を通りかかった。

透哉は何か公園から嫌な予感がすると感じて公園の奥へと入っていた。

そして透哉は公園で倒れている人を見つけた。

「（これは・・・）」

透哉は奥へ入っていく。

すると突然悲鳴が聞こえた。

「キャー——」

透哉は急いでいく。

「（どうなっているんだ・・・）」

そして一番奥へと行った。

そこにはミイナとそのミイナの友達が倒れていた。

透哉は急いで隠れた。

「（あれは・・・あいつの・・・）」

と透哉は思う。

「お願いだから・・・私の友達まで被害を出さないで・・・」

とミイナは言っている。

「ならば・・・交換条件っていうのはどうだ・・・お前の命は残してやる・・・その”術”をいただこうじゃねえか・・・」

と男はミイナに言う。

「（”術”！？　もしかして・・・術者狩りの仕業か・・・）」

と透哉は思う。

「さてと・・・どうだい？お嬢ちゃん。　お嬢ちゃんよ言うより・・・
・オリジンパワーよ・・・」

と術者狩りの男は言う。

「・・・」

ミイナは黙り込んでいた。

すると

「わかつ・・・」

とミイナは言いかけた時、透哉は決意を決めた。

「おい！お前・・・ そいつを離さないか・・・」

と透哉は言う。

「おやおや、オリジンパワーを守る人かい・・・ ふーん ザックス・アンドレスじゃなさそおだな・・・」
と術者狩りの男は言う。

「（ザックス・アンドレス・・・ やはりあいつも狙われているのか・・・）」

と透哉は思う。

「理由はわかっている。でもそいつを離せ。簡単には渡さない。」
と透哉は言う。

「そうかい・・・ ならば俺に勝てるかな？？」

と術者狩りの男はとても速いスピードで透哉を殴る。

「ぐはっ・・・」

と透哉は倒れこむ。

「おやおや、術者じゃないんかい？ 術者じゃネエ奴は俺に勝てるのか・・・」

「（っち・・・うまく術をコントロールできない・・・）」

と透哉思う。

「いけえー ストーンハンド！！」

と透哉は行くがうまく術が成功しない・・・

「おいおい・・・ その力で術を使ったとでもいうのか？ 全然いたくねえぞ。」

と術者狩りの男は言う

「もう一度言うが・・・ 術者じゃねえやつは俺に勝てねエンだよ！！」

と術者狩りの男は吹き飛ばす。

「ぐはあっつ」

さっきよりも強いパワーで口から血を吐く。

「さてと・・・終わりにしようか・・・」

と術者狩りの男は透哉のところへ行く。

「俺のスピードと力でお前の首を絞める・・・これで終わりだ・・・」

と透哉は首を絞められる・・・

「（もう終わりだ・・・）」

それを見ていたミイナは

「（私のために・・・私のためにしてくれてるんだわ・・・私も動かなきゃ・・・）」

とミイナが動こうとしたとき。

「ぐはっ・・・」

と術者狩りの男は透哉の首を離した。

「なんもしてねエ奴を勝手に殺すんじゃないぞ。 てめえ脳みそあるのか？」

とそこに居たのはさっきの・・・

第8話（38話） 修学旅行（前書き）

☆この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。☆

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかったら、評価・感想・お気に入りをお願いします。

第8話（38話） 修学旅行

6月△日

今日は修学旅行で北海道へ行く。

前日に荷物などを用意していて事情をミイナに話しミイナは綾乃たちがあずかることになった。

もし何かがあったら時のために。

朝7時に成田空港の国際線ターミナルの受付口13番の前に集合だった。

成田空港まで少し遠いから空港と繋がっている特急を使うことにした。

そして朝7時。

「はい、みなさん集まったね。」
と学年主任の鬼頭が言う。

どうやら全員そろっているようだ。

「おはつよー海藤!!」
といつものように斉藤が話しかけてくる。

「お前・・・いつもそんな格好してんのか・・・」
と普段見れない私服を見て聞く。

「今日は少しかっこつけてるんだよ。海藤は・・・普通の格好だな。」

と斉藤は言う。

「当たり前だろう。なんで修学旅行で格好つけねえといけねえんだよ。」

と俺は言う。

「お前は・・・わかってねーな。ほれ、近藤見てみろよ。あの格好すげえだろ？」

と真菜を指でさしながら斉藤は言う。

「なあ？めちゃくちやあの服ええやんか？人ってよ ファッションで変わるんだぞ・・・」
と斉藤は説明する。

「へいへい、わかった分かった。ところでグループは俺と斉藤と近藤じゃなかったか？」

と俺は言う

「札幌市内分散はそうだぜ。寝るときは違うぞ」
と斉藤は言う。

「そこまで俺は聞いてねえぞ。」
と俺は言う。

そんな会話をしていたら先生が航空券を渡してくれた。

「12Dか・・・ お前はどうか？」
と俺は聞く

「俺は13番のAだぜ。」
と斉藤は言う。

そしてみんな飛行機に搭乗した。

「13番のDと・・・」

と探しているその時だった。

なんとなく後ろから目線を感じた。

すぐに後ろを向いたが俺を見ているような人はいなかった。

・・・

1時間半後俺たちは新千歳空港に着いた。

「北海道だー！！」
と斉藤は着いた瞬間に叫ぶ。

降りた後に今日初めて小鳥坂を見た。

「お前いつもと私服が違うじゃんか。」
と俺は聞く

「あんたね・・・修学旅行に私服なんて着るわけないでしょ？ 常識ないわね。」

と小鳥坂は言う。

「じゃあ・・・少し気にしてるって訳か・・・」
と俺は言う

「違いますー！！ そんなわけないでしょ！！」

と小鳥坂は言いながら先に行った。

ーイギリスー

2週間前、ある大学にて

「ところでドクターアンドレス。 本当にこんなことをしているのかね？」

と一人が言う。

「何を言ってるんですか。これがあなたの実験に使われる命ですよ。

そこら辺のアホな奴はオリジンパワーに夢中になって簡単に命を渡すぐらいなアホなんですから、僕はその命より欲しいのは新しいパワーを作ることですからね。」

と言う。

「ならば、お前の力にもなれるようにこの実験を頑張ろうか。それよりお前はこれから日本へ行くみたいだな。」

と言う。

「そうですね。僕の予想だとこれからお偉いさんたちが面白いショーでも見してくれるそうですから僕もそれを現地で見たいのですね。」

と言う。

「相変わらず変な奴だなお前は。好きにしろ。こっちが出来たら連絡をする」

と言ひ話は終わった。

・
・
・
・
・

「なあ海藤。やはり北海道って言ったら蟹やんか。蟹食べにいかうや」

と斉藤は言う。

「ちょっと！斉藤！昼からそんな高いものを食べるの！？ありませんでしょ！」

と近藤 真菜は言う。

そう、今 俺たちは札幌市内分散を行っているところ。班は俺と近藤と斉藤。2人は昼飯で喧嘩をしている。

「ならさ・・・昼は簡単にあそこで済ませようぜ・・・」
と2人に某ハンバーガーショップを指して言う。

2人はその店を見てお互い了承を取ると店の中に入る。

「やっぱり迷った時はここよね」
と近藤は言う。

「なんかいつも食べてる味やけどまあこういう時には便利やな」
と斉藤は言う。

「さてと、この時間のまま行くと次の目的地まではもう少しだな・・・」

と俺が言ったその時だった。

「（目線を感じる・・・誰かにつけられているのか・・・）」
と思う。

「どうしたの！？考樹！？」
と真菜は言う。

「いや、なんでもない・・・」
と俺は言う。

「お・・・お前ら・・・名前呼び合う関係やったんか・・・」
と斉藤は言う。

「ち・・・違うって！！そういう意味じゃ！！」
と真菜は言った時

「ここを早く出よう。」
と俺は言う。

・
・
・
・

何なんだこの目線は・・・ 朝空港に着いた時から感じる・・・
ましては尾行されている感じだ。

俺たちは無事に観光を終えホテルに戻った。偶然1階の受付前に小

鳥坂が居た。

俺のことを知っているのはこいつと真菜だけ。とりあえず状況を話した。

「北海道に来てまで！？ あんた・・・気のせいじゃない？ ここまでさすがに来れるとは思わないんだけど・・・」
と小鳥坂は言う。

それもそのはずだ。俺たちは朝早く東京を出ている。それに術者狩りはそこまでお金を払い北海道まで来るのか・・・

と考えていた。

「とりあえず・・・私も気を付けてみるわ・・・」
と小鳥坂は言う。

「明日は北海道のバスツアーに参加します。朝7時半に下で朝ごはん。8時半には出発だから」
と学年主任は言う。

皆、各部屋に戻り22..00には消灯だった。同じ部屋には斉藤も居る。

いきなり斉藤がトランプをしようと言い全員で夜遅くまでトランプをしていた。

・・・

朝7時に起床し7時半に朝食をとり8時半にはバスに乗ると言う予

定通りの動きで動いた。

このバスツアーが最悪になることも知らずに。

俺たちは普通通りにバスに乗車する。

バスに乗って都市高速に乗りバスの中はバスレクとかで大盛り上がりだった。

高速道路を走り出して20分後ぐらいだった。

3・・

2・・

1・・

とカウントするようにバスは距離を縮めていた。

すると急にバスが大きな音を立てて爆発をしバスは横転してしまっ
た。

「うわあああ・・・」

とバスの中の生徒は言う。

「何が起きたんだ!!」

とバスの中はパニック状態だった。

運転手が

「左側と後ろの非常口を開けて!!」
と叫ぶ。

バスの中は煙ですごかった。

「先生！！ 後ろに車が衝突していて非常口が開けません！！」
とある人が言う。

俺もあまりにももの衝撃で少し目が開けられなかった。

目を開けると生徒の中には頭から血を流していたりしている生徒もいた。

この時みんなは事故だと思っていた。

「先生！こっちの非常口は開けられました！」
と生徒が言う。

運転手が

「バスの窓側にある赤いハンマーで窓ガラスを突き破ってください！」
と言う。

俺はちょうど一番窓側に近かったから仕方なく生徒を踏みながら窓ガラスを割った。

そして俺は先に外に出て生徒の手を引っ張りながら引きづりあげた。

・・・

「事故にしては煙がすごい・・・」

と俺は思っていた。

全員出てきたときには救急車とパトカーがやってきた。

俺はとりあえずバスから離れようと思い1メートルぐらい来た道を戻っていった。

すると道路に四角い何かが焦げて落ちていた。

「(爆弾!?)」

と俺が思った時後ろから小鳥坂が走って俺を突進した!!

「危ない!!」

とその時その四角いものは爆発をした。

ドーン

いったいなんなんだ。

爆弾は爆発したがこの爆発による被害は何も出なかった

「大丈夫!？」

と小鳥坂は聞く。

「ああ大丈夫。ありがとう。しかし、なんでこんなことが・・・」
と俺は聞く。

術者狩りよ・・・と知っている小鳥坂だが責任を負わせないために
言わないことにした。

「なんかの事故わよ・・・」
と小鳥坂は言う。

「そうか・・・しかし何の目的・・・」
と俺が言った時

「あ、先生が向こうで呼んでいるわ!!」
と小鳥坂が急いでいい2人は戻る。

・・・

俺たちは警察のバスを使用し治療が必要な生徒は病院へ、必要のない生徒は署の講堂へと運ばれた。

警察は事件の調査に忙しそうだった。

真菜と斉藤は治療が必要と判断され病院へ運ばれたが俺と小鳥坂は必要がないと判断された。小鳥坂は誰かと携帯で話していた。

その時俺の携帯に電話がかかった。相手は綾乃からだった。

「もしもし」
と電話に出る。

「あ、ザックスさん!! ニュース見ました!! 怪我の方は!」
と急ぎながら綾乃は言う。

「ああどうにか大丈夫だった・・・ まあけが人は酷いがな・・・」
とまるで他人事のように言う。

「そうですか・・・ならば私の話を真剣に聞いてもらえますか。それとその話を聞いて自分が全て悪いと思わないですか？」
と綾乃は言う。

「どういう意味だ!？」
と俺は聞く。

「とにかく私の話を聞いて自分で全ての責任を取らないことを約束してくださいませんか!？」
と綾乃は言う。

「ああ・・・わかった。だからなんだ。」
と俺は聞く。

「これは事故ではないです。事件です。それもテロでもなく偶然でもなく・・・術者狩りの仕業です。」
と綾乃は言う。

「!？」

「おそらく、術者狩りはあなたを追跡しそこにオリジンパワーが居ると思っていたんでしょう。バスを爆破させるまでなかったのに・・・とにかくそういう訳です。」

「それは・・・本当か？」
とザックスは聞く。

「まだ詳しいことは分かりませんが・・・まだ何が起きるかわからないので注意して下さい。」

と綾乃は言うと言話を切った。

自分で全ての責任を取ろうとしないでください。

この言葉が頭に響いた。

—end—

『事件は昨日の朝、札幌市内の都市高速道路で修学旅行をしている生徒が乗っているバスを狙った爆発テロが発生しました。生徒92人中34人が乗っている1台のバスが爆発し23人が負傷しています。また北海道警察は犯人の行方を探しています。警察によりますと爆弾は道路に設置されていて何者かが遠隔で操作をされたものと……』

今日はこのニュースがずっと流れていた。

東京にいる他のみんなは心配していた。

俺のせい……か……

と思っていたがやはり綾乃の言ってたことを思い出してしまう。

全てあなたが責任を負う必要がない……か……

1晩が空けとりあえず俺たちは東京へ帰ることが決まったかしもしこれがテロの可能性とすれば飛行機は危ない。ということで急に新幹線で帰ることになった。

けがをしている生徒は北海道に残ることになった。俺たちは警察署

の講堂の中で待っている。講堂は結構広く警察は寝袋や食料まで出してくれた。

すると小鳥坂が俺のところへやってきた。

「ねえ、警察の人が・・・」
と小鳥坂は言う。

どうやら俺たちと話をしたいそうだ。

俺と小鳥坂は警察に誘導されながらドラマとかで見る取調室・・・ではなく学校の応接室みたいなところに呼び出された。

「ああ海藤君に小鳥坂さん。忙しいところにごめんね。」

と話すのは今回の事件を担当する警察官だった。

「話は全て春田教授から聞いているよ　ああ自己紹介を　私は今回の事件の捜査を担当する増田です。」
と増田は言う。

「春田から聞いてるってどういうことですか？」
と俺は聞く。

「ああ春田教授は私の姉。結婚してから春田になったのさ。まあそんなことはどうでもいいけど。今回は事件と見るより・・・テロと言った方がいいかな。」
と増田は言う。

「まあ海藤君はオリジンパワーと言われる起源の力を持っている子と一緒に住んでいるんだよね。それで術者狩りという集団はそのオ

リジンパワーを狙っている。それで、今回のテロは早くオリジンパワーを奪おうと何者かが仕掛けたものさ。ああ、そうだ、海藤君に一つ言っておかなければならない」

と増田は言う。

「君が全て責任を取る必要はないんだ。何も君が悪いわけじゃない。」

と増田は言う。

「わかってます。でも・・・このままじゃ被害が・・・」
と俺は言う。

「そのために君たちには僕たちの作戦に従ってほしいんだよ。これも姉と一緒に作ったんだが。まず、他の生徒は新幹線で帰ることにしたよね。もし、そこに君たちが居たらまたテロが起きる可能性がある。だから君たちには少しだけここに残ってもらいたい。ただそれだけさ」

あまりにも簡単な作戦で少し驚いたがまあそれぐらいならと思っていた。

「わかりました。そうします」
と俺と小鳥坂は言う。

「そう、とりあえず2人だけだから1室部屋が空いているもんでしばらくそこを使っておいてくれ。」

「はい・・・分かりました・・・ あれっ・・・ 部屋・・・
2人・・・ 1室・・・」

と言う

「っておい！！　なんで2人なのに1室！？　おかしいでしょ！？

」

と俺は言う。

「そ．．．そうよ！！　なんで私が！！　え、？　こいつと一緒に！
？」

と小鳥坂も言う。

「まあまあ．．．2人とも落ち着いてくれ．．．　1室しか空いて
いないんだ．．．」
と増田は言う。

．．．
．．．

2人は部屋に案内され部屋に入る。

「あんた．．．風呂場で寝なさいよ．．．」
と先に小鳥坂に言われる。

「はいはい．．．分かりました。」
と俺は言う。

ここは警察署とは思えないほどホテルみたいな感じの部屋になって
いた。

とりあえず俺は外の情報が欲しいなと思いテレビをつける。

ニュースはこの事件について言っていた

ずっとニュースで言ってるなーと思っていると突然外からパトカーのサイレンが鳴り沢山のパトカーが外へ出て行くのが見えた。

そしてニュースも突然切り替わり

『速報です。昨日のバス爆破事件で生徒が運ばれた病院に生徒を人質にした立てこもり事件が発生しました。病院の関係者によりますと犯人は不思議な力を持っていることから術者ということが分かりました。警察は現在・・・』

というニュースだった。

「おい・・・どういことだ・・・」
と俺は言う

「立てこもり？なんで病院に・・・」
と小鳥坂は言う。

すると部屋の内線電話が鳴った。

「もしもし・・・」
と俺は出る。

「ああ海藤君。今ニュースは見てるかね？」
と増田の声がする。

「はい、見ました。いったいどういことが・・・」
と俺は言う。

「まだこっちにも事情が分からないんだ。とりあえず言いたいことは君たちはこの部屋・警察署から出ないでくれ。」
と言われ増田は電話を切る。

「何の真似だ・・・」
と俺は思う。

ニュースはずっと速報を言っている。

「ねえ・・・考樹・・・」
と小鳥坂は言う。

「なんだ・・・」
と俺は言う。

「あんた・・・この事件全部あんたが悪いと思っている？」
と小鳥坂は聞く。

「そうだな・・・そう思っている」
と俺は言う。

「そうよね・・・そう思ってるよね・・・じゃあ私達このまま
待機していいのかしら」
と小鳥坂はいい。

「そうだな・・・ダメだな・・・」
と俺は言う。

「ならば・・・私にいい方法があるの・・・」
と小鳥坂は言う。

・
・
・

東京。

「しかし、大変なことになったな。」
と裕太はみんなに言う。

「本当にそうだね。でも北海道まで術者狩りが行くなんて。」
と透哉は言う。

「もちろん狙っているのはザックスではなくミイナちゃんなんだよね」

と綾乃は言う。

「とりあえず、俺たちが出来ることはミイナを守ることだ。ザックスのためにもな」
と裕太は言う。

・
・
・

一方ロンドンでは・・・

全員、術者による講堂に集まっていた。

「ねえどうしたんですか？」
とルメリは聞く。

「どうやらボスが急に話したいことがあるって・・・」

とキリヤは言う。

「そうなんですか・・・」
とルメリは言う。

すると舞台にボスがやってきた。

「みんな、集まってくれてありがとう。少し話したいことがあるんだ。最近のロンドンはずか平和になってきたんだ。あの時のように俺たち術者を術者狩りが襲ってくることも無くなり普通に平和に過ごしている。それはなぜだかわかるか・・・」
とボスは一気にいう。

「奴らは目的を変えたんだ。発見されたオリジンパワーへと。それに奴らはオリジンパワーがここにはないということを知り日本にあることが分かった。そのオリジンパワーとは・・・ミイナ・アイルの事。ここに知らない人はいないだろう。お前らも知っている通りオリジンパワーを使用すればこの世界だって破壊が出来る。それを術者狩りどもは考えている。奴らはこのイギリスを世界の頂点まで持っていきたいと・・・まあこの話は中にも知っている人はいらるだろう。だが、俺はそれだけが言いたいん訳ではないんだ。」
とボスは言う。

「イギリスは早くそれを求めたため俺らの第2の故郷・・・日本に戦争を起こす。」

とボスが言った途端、皆がシーンとなった。

「おい・・・ボス・・・それはどうということだよ・・・」
と一人が言う。

「俺たちは・・・またイギリスの武器にされるんだ・・・」
とボスは言う。

「もう、戦争は起きないんじゃないの!？」
とキリヤは言う。

「イギリスは本気でオリジンパワーを必要としている。そんなことであれば戦争なんて起こすだろう。だが日本相手じゃ俺たちも出来ないがそうすれば命もないだろう・・・」

とボスは言う。

「そんなの無理よ!! 要するに・・・オリジンパワーをイギリスに渡すわけでしょ!？ 世界を破壊することもできるんだよ!？ それに持っているのはミイナちゃん・・・」
とキリヤは言う。

「もちろん、その通りだ。 それにお前たちがオリジンパワーを持って帰ろうとしても無駄だ。」

とボスは言う。と皆は意味が分からないような顔をしている。

「ミイナの隣にはザックス・アンドレスがいるからな・・・」
とボスが言う。とみんなは驚きを隠せなかった。

「ザックスがミイナを守っている。 そのため俺は2人を日本に送ったんだが・・・間違いだった。 こんな戦争になるとは思わなかった。」

とボスが言う。

「おいおい！！ザックスにかなう訳ないじゃないか！俺らの力じゃ無理だよ・・・」
と一人が言う。

「だが従うというのはオリジンパワーをイギリスまで持っていくこと・・・それが出来なければ命は・・・」
とボスは言う。

皆は考え込んでいた。

・
・
・
・
・
・

「おい、こんなんで大丈夫なのか？」
と俺は聞く。

「うん、まだ大丈夫みたい。」
と俺たちは部屋から出て下のフロアで隠れている。

「あ、来た！」

と小鳥坂は言う。俺たちは講堂から出てきた同じ学年の中に隠れた。

小鳥坂は連絡をしていた友達にお礼を言っている。

どうやらこの中に隠れて逃げ出すという作戦らしい。

俺たちはどうにか外へ出ることが出来た。

すると小鳥坂はこっち！！と言って病院の方へと走っていった。

・・・

一方病院では。

「増田係長！ 犯人からの電話です。」
と部下は言う。

増田は早くも現場にいた。

増田は車の中に戻り電話に出る。

「もしもし」
と増田は言う。

電話の奥からは小さい声で英語が聞こえた。

そして

「あ・・・あの・・・僕は病院の外科担当の石田です・・・その・・・英語を翻訳するためにこいつを使っている・・・と言っています。」

と石田は言う。

「わかった・・・」
と増田は言う

「あ・・・あの・・・犯人が言ったこと以外を話すと首を斬る、それと・・・そっちからの質問はなしだ・・・と言っています。」
と石田は言う。

「それでいい」
と増田は言う。

「とりあえず・・・犯人が言っているのはここにオリジンパワーをよこせ・・・そして明日までによこさない・・・こいつの命と・・・生徒の命は燃やす・・・と言ってます・・・」
と石田が言うと言話は切れた。

「（オリジンパワーをどうやって・・・）」
と増田は思った。

「こちら増田だ。犯人は英国人。中の人質は外科の医者石田と生徒15人だ!!」
と増田は言う。

そして増田は電話を取り出して春田に電話をした。

・・・

「ここが裏口みたい・・・」
と小鳥坂は言う。

どうやら病院まで来たみたいだ。

「私はここで待っている・・・それと・・・カードを選んで。」
と小鳥坂はカードを出した。

「わかった。ソードを借りるよ。」
と俺は言う。

そして俺は裏口の扉を破り中へと入っていった。

— e n d —

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7509x/>

ダークマジシャン-2nd stage-

2011年11月4日03時00分発行